

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

障害に寄り添うということ

茅ヶ崎市立第一中学校

一年 鈴木千隼

僕の祖父はパーキンソン病だ。今から十二年前に発症をし、仕事を続けながら治療をしている。この病気は、体が動かしにくくなったり、震えたりするなどの運動機能に関わる症状が出て、少しずつ悪化していく。祖父は薬の効果も切れてくると、体を動かしづらくなり、歩くことが難しい。でも、少しでも今の体の状態を保てるようにと朝四時に起きて仕事に向かう。こんなに早起きなものは、身支度にとっても時間がかかるからだ。トイレをするのも、シャツを着るのも、人の何倍も時間がかかる。普段の生活の中では、お風呂に入ることや階段の上り下りが特に大変で苦労するようだ。でも、僕が小さい頃から祖父はこの病気になっていたので、少し動きがゆっくりで、腰が曲がっていても、毎日遊んでくれたり、保育園まで

迎えに来てくれたりしていたので、あまり気にならなかった。

祖父が障害者手帳を取ったのは、五年前のことだ。障害者手帳は、自分が障害者であることを証明することができ、様々な場面で、福祉サービスを受けることができる。今回、この作文を書くために、祖父と病氣のことについて色々話をし、障害者手帳を持つことも初めて知った。障害者手帳を取るまで自分の障害について悩んだことがあったそうだが、今は自分の体のことも受け入れ、人からどう見られているか気にしないようにしているようだ。

祖父の願いは、パーキンソン病だからできないことが沢山あると周りの人に思ってもらいたくないらしい。もちろん、自分でできないことが多くなっているのは理解しているがこれから何でも自分でチャレンジしていきたいと思っている。障害があるからできないという偏見を持たずに温かく見守って欲しいと思っている。そして、どんな障害でも受け入れられる社会であってほしいと考えているようだ。

僕は祖父の気持ちを聞いて、障害に対する気持ちが少し変わった。前は、助けてあげようという気持ちで、自分が先にやってあげていたけれど、今は違う。障害があるとできないこととはたくさんある。でも、まずは相手が何をしたいのか、どうしたいのかという気持ちを聞くことが、障害を受け入れる最初の一步になる。そして、困っていたら「一緒に」と寄り添う姿勢が大切だと思う。今度、祖父と食事をし、何が食べたいのか聞く場面があったら、まず「どうしたい？」と聞くと思う。